「超未熟児生育」報道と、「誕生死」番組に接して

報道で、米国で昨年１０月に、２１週と６日で超未熟児で生まれ、誕生時には体重２８３．５ｇ、身長２４ｃｍで、胎内での滞在日数が世界で最も短い新生児が、家族と自宅に戻れるまでに成長したことを目にした方も多いと思う。
通常は２３週未満で誕生した場合は育たないと云われいるし、日本では妊娠２２週未満は合法中絶期間でもあるぐらい。今更ながら、その生命力と、周産期医療の凄さに驚かされる。

一方、同じ日の夜、昨年１１月に見た誕生死をテーマとした「忘れられない小さな命」の続編である「忘れられない小さな命②誕生死への反響から」を見た。
流産・死産・新生児死などの予想外の我が子の突然の「誕生死」をどう受け止めればいいのか戸惑い、悩む母親（女性）たちへのイタンタビュー、同じ境遇をいたわり合う様子、等々で構成された番組だった。

以前に「誕生死」に関する HP を目にしていたが、「自分たちの子どもは確かにこの世に誕生したのだ」という想いから、従来の「死産」という表現でなく「誕生死」という表現を使いたいという女性故の想い……。

奇しくも同じ日に、一方は、驚異的とも云える周産期医療の成果の報道、一方は、それを持ってすら救えなかった生命とその母親としての女性故の哀しさの番組に接し、ウ～ンと唸るしかない自分……。
こうした女性たちの心のケアの施策立案の所管省である大臣の「女性は産む機械」などという発言は、到底許されるべきものでない。
大臣は、「機械」と「人間」の異なりすら理解していないということなのだろうか。

自分は長年各学校の授業の中で、「生命」に纏わる事柄を、まだ１０代の学生たちにも語りかけてきた。
何年か前に、非常勤の自分にこんなことまで話していいのかと思ったが、中絶体験を告白してくる学生もいたし、１度ならず２度の体験を告白してくる学生もいた。
その学生たちも、授業を聞いて体験を反省しつつも、一人の女性としての哀しさを聞いて欲しかったのだろうか…。

さて、次年度からの授業で、今回の報道・番組等を加味し、どう「生命」を語りかけるか、新たな課題が自分に課せられたように思う。
みなさんであれば、こうした報道等と絡ませて「生命」についてどう語りかけるか、ヒントをいただければ幸いです。

阿部幸泰　　（2007 年 2 月 22 日　記）